論　文

江國香織「おそ夏のゆうぐれ」論
―身体「感覚」・「孤独」・セクシュアリティ―

堀口 真利子[1]

[1] 一般教育科－国語（Liberal Arts- Language Arts National Institute of Technology, Nagaoka College）

A study on Kaori Ekuni " Osonatsu no yugure "
-The Body "sense", "loneliness" and the sexuality-

Mariko HORIGUCHI

Abstract

Ekuni Kaori is a popular female writer of romance novels. "Osonatsu no yugure" written by Ekuni Kaori is also a story of a sweet romance between men and women. However, considering the way Shina's loneliness and sensation are being described,I do not think the story line follows the pattern the straight romance takes. This story is not a traditional romance in which a man controls the inner thoughts of a woman but the truth is that she is an active independent individual in her own right.

It is true that the story is about a romantic relationship between a man and a woman,but the focus of the story is on how an unfettered free woman would lead an existence out of the framework of traditional heterosexual love relationship. The aim of this paper is to argue that the work is not a straight romance in the sense that a woman is not an object of love but a master of her own self.

Key Words : *woman,sexuality, the body, loneliness*

１．はじめに

江國香織「おそ夏のゆうぐれ」は，森永製菓株式会社が 2007 年 9 月から 2008 年 3 月までの間に実施した「森永チョコレート　カレ・ド・ショコラ」のキャンペーン・プレゼント本「ひとり時間にカレ・ド・ショコラ　6　ショート・ストーリーズ」において発表され，単行本『甘い記憶』(新潮社，2008)に所収されている．その後、本作は第 38 回川端康成文学賞を受賞した短編集『犬とハモニカ』（新潮社，2012）に収録された．『甘い記憶』は，森永製菓の企画による商業的な作品であるゆえ，所収された 6 人の作家が手がけた各々のショートストーリーには，いずれもチョコレート菓子が登場する．本作においても後半部でチョコレートを齧る女の子が登場し，主人公の心境に影響を与える重要な役割を担っている．本論文では，『犬とハモニカ』に所収された「おそ夏のゆうぐれ」について論じる．

本作は，主人公志那が恋人である至との夏の思い出を，一人暮らしをするマンションの一室で回想するところから始まる．その思い出とは，海水浴の後で志那が至にねだり，切り取ってもらった彼の皮膚の一部を食べさせてもらうというものである．夕方になり，彼女は夕食の買い物をするために外出する．

〈おそ夏のゆうぐれ〉のなかで，志那は一人佇む女の子を見かける．彼女はその女の子に小学生の頃の自分の姿を重ね，少女と同じように，現在の自分も変わらず「孤独」であるということに気付く．その時，ふと女の子が手に持っていたチョコレートに齧りつく．その瞬間，志那はチョコレートの甘い香りに包まれながら，至の皮膚の一部を食べた時の味や触感を思い出すという筋である．

出版元である新潮社のウェブページには，『犬とハモニカ』刊行記念特集として「江國香織／旅と恋をめぐる六つの物語」と題するインタビューが掲載されている[1]．「本作を恋愛小説と呼んでよいでしょうか．恋人たちの甘美な時間が描かれ，切実な感情が強く伝わってきます．どの恋人たちもとても率直なことに感動します.」というインタビュアーの質問と感想に対して，江國は次のように述べている．

> 〔前略〕三編とも，（「寝室」，「おそ夏のゆうぐれ」，「ピクニック」，引用者注）時間と，それに伴う変化を書きました．終焉，変化，変質．避けられないことならば，受け容れるしかない．たぶん私はそれを書きたかったのだと思う．受け容れる，ということ，それぞれの受け容れかた．人も恋も儚いですが，同時に感動的に強い．流れに逆らうから強いのではなくて，流れていくから強いのだと思います．

この引用で着目したいのは，本作の要点について，「時間と，それに伴う変化」を「避けられないこと」として捉えた上で，それを「受け容れるしかない」と述べている点である．このことを江國は，「強さ」として肯定的に評価している．しかし，本作品には，このような江國の言説とは別の批評的な内容が描かれているとも言える．本論文では，このことを，女性のセクシュアリティとその能動性に関係する物語という観点から論じる．その際に着目するのが，主人公である志那の「孤独」と身体「感覚」である．これらがいかに表現され，それがどのような批評性を生み出しているのかを明らかにしたい．

２．〈孤独の城〉を侵食されること

「おそ夏のゆうぐれ」の前半部分は，志那の回想がその中心に据えられている．語りは，志那の回想に焦点化される場合が多い．語り手によって捉えられた至との「甘美」な時間の回想は，まさに恋愛物語そのものだと言えよう．その「甘美」さとは，過去を回想する現在の志那が、生（なま）な感覚としては捉えられない，その意味ですでに失われたものである．その失われた「甘美」な時空間を回想する志那は，それを擬似的に追体験しようとしているようにも読める．その意味において，志那の回想の磁場は，彼女の日常（＝今・ここ）から離れ，彼方にある非日常的な世界を追体験したい欲望が露呈している瞬間だと述べることが出来よう．しかしながら，この小説の前半部分は，志那のこの欲望が渦巻くような単純なテクストではない．志那の日常（＝今・ここ）もまた，そこには描かれている．この日常の挿入が，失われた「甘美」な時空間，即ち恋愛物語の在り方に，ある種の複雑さを加えている．

語り手は，志那の回想――至との恋愛についての煩悶を語りながら，彼女の日常生活そのものを同時に語っている．端的に述べると，彼女の煩悶とは，志那の至との関係に対する二律背反的な感情だと言える．このような煩悶は，彼女が彼に魅かれながらも，自身の「部屋の中で，男と直接結びつくものを目にすることを，志那は極端に嫌」い，自分自身で「隅に置いた地球儀と天球儀（男からの贈り物）にはシーツをかぶせ」，それらを「滑稽なオブジェ」に変更させるのである（71―72 頁）．つまり，彼女は自分の私的空間を恋愛から切り離すことに躍起になっているのだが，そのこと自体が彼女のアンビバレントな至に対する恋愛感情そのものの表出となっている．彼女の私的空間，即ち日常生活と，「甘美」な記憶としてある至との恋愛という対立軸は，志那自身が自認するように，後者が前者を侵食することになる．

実際，志那は恋愛に支配された自分の日常生活に対して「現実感が希薄」だと感じてしまうのである．だが，注目したいのは，そのプロセスである．至とのことを回想し，彼との関係に思いを巡らす志那は，語り手によって，ある種の心身が乖離した人物として読者の前に提示されている．回想に耽りながらも，志那は洗濯を行っている．「洗濯乾燥機がとまり，終了を知らせるブザーが鳴った」ので，志那は洗濯物を取り出し，それをたたみ，「たたんだ洗濯物をすべて所定の棚なりひきだしなりにしまい終え」（79 頁）るのである．これらの一連の動作に淀みはない．恋愛に心を奪われるがために，呆けてしまって家事が滞ったりはしないのだ．しかし，語り手が提示するように，彼女の心理は，常に至との関係

に憑りつかれているのである．彼女は日常生活を無意識的に反復する身体と，それに対立する非日常を指向する内面とによって引き裂かれた状態，すなわち，心身が乖離した状態にある女性として語られていると言えるのである．

彼女のアンビバレントな状態とは，彼女の内面で展開される恋愛に対する煩悶に関連して表現されているのではない．それは，彼女の日常生活を生きる身体と，恋愛に憑かれた内面との拮抗関係によってもまた表象されていたと分析できる．しかし，日常生活のなかに置かれた鈍感な身体は，至との恋愛に侵食され，「億劫でも，現実の日常に対処しなくては」（82 頁）と自覚されるまでになる．意識を超えたレベルにおいて身勝手に動いてしまう日常生活を送る身体が自覚されることで，日常に対する非日常の侵食が否応なしに進行していることが理解できるのだ[2)]．

至との恋愛が，志那の感情だけでなく，日常生活を生きる身体をも侵食することにおいて，「ひとり暮らしを始めて四年目の，小さいが日あたりがよくて気に入っているマンションの一室」（77 頁）を「自分の城」と呼ぶ志那は，アイデンティティを喪失することになる．

> 志那は「自分の城」のつもりのマンションを眺める．クリーム色のそっけないカーテン，実家から運び込んだ本箱．ストライプ（白地に茶色）のソファと，下北沢の骨董屋で安く買った昭和二十年代の卓袱台．そういうもののすべてが，何だかどうでもいいように思える．いままで大切にしてきたもの，特別だと思ってきたものたちの，この色褪せ方はどうだろう．（81—82 頁）

「自分の城」とは，彼女が誰の侵入も許さない領域を示しており，極めて私的なものであることを誇張して表現している．その私的領域の変容が，この引用では具体的に示されている．至との恋愛によって，自らの価値観そのものが変容していくことを，「自分の城」の崩壊という観点から表現しているのだ．そして，志那は私的領域が崩壊していく状況を次のように語る．

> ここに至さんはいないのに，あたしはつねに至さんの視線を意識している．彼に見守られているものとして，行動している．
>
> それは甘やかではあるが，そらおそろしいことだった．
>
> 苛立ちがかすめる．こんなのはおかしい，と思った．ちっともあたしらしくない．
>
> 志那にとって，孤独は誇りだったのだ．ごく小さな子供の時分から，ずっと．（82—83 頁）

ここで重要なのは，志那の内面に至の「視線」が入り込んでいる点であろう．至の視線を内面化させることは，恋愛の虜になることと等しいが，しかし，それは同時に志那にとっての足枷となっている．志那はそれを「孤独」の問題として語っているのである．至の「視線」を内面化させたことで，常に至を意識してしまい，それが彼女の「誇り」であった「孤独」を奪い，「あたしらし」さを消し去るのだ，と志那は考える．このような恋愛感情とアイデンティティの喪失の関係性は，恋愛という親密性がもたらす負の側面を如実に表していると言えよう．だが，このことは，恋に翻弄されるという意味を示しているだけではない．

この志那の状況については，ミシェル・フーコーのパノプティコンに関する有名な議論[2)]を補助線にすれば，その問題の基幹を捉えることができる．フーコーは，ベンサムが考案した「建築装置」である「一望監視施設(パノプティコン)」を紹介し，その主要な効果を「権力の自動的な作用を確保する可視性への永続的な自覚症状を，閉じ込められる者にうえつける」（203 頁）こととしている．さらにフーコーは，この建築装置を現代社会システムの管理・統制された状態（「監視の社会」（217 頁））の比喩として転用する．志那が「見守られている」とは言え，見方を変えればそれは，パノプティコンに収監された罪人の内面に等しいのではないだろうか．

このように考えれば，彼女にとっての「自分の城」とは，パノプティコンのような監視システムと本質的に変わりない空間に変容していると言えよう．志那の言う「そらおそろしいことだった」という表現に折りたたまれているのは，恋愛によるアイデンティティの混乱を客観的に自己認識した感情の吐露と，自分自身の「行動」内容を至の「視線」を抜きにしては決定不能な監視装置を，自らの主体に宿らせてしまったことへの「おそろし」さである．それは，「行動」だけではなく，彼女の認識や感覚までをも支配しているということであろう．志那はこのことを直感的かつ敏感に嗅ぎ取り，無自覚的に「そらおそろしい」と述べたと言える．

このように理解されるのであれば，志那が同時に抱く「苛立ち」は，至との恋愛関係がもたらした親密性の暴力に対するささやかな抗いとして理解できる．とはいえ，どうにも拭えそうにないことを感じつつ「苛立」ってみせる志那の姿は，それ以前に経験した至との間に起きた「甘美」な出来事からみれば，何とも弱々しく虚しい．「甘美」と呼ばざるを得ない出来事は，「苛立」ってみせることを無意味なものにしてしまうほど，強烈且つ根本的な問題を抱え込んでいるからである．それは，志那の〈孤独の城〉が崩壊していく，その原因となった至の「視線」が，どれほどまで彼女の心身の奥に入り込んでいるのか，その問題を表現していると考えられる．そして，それは同時に「孤独」に関する複雑な問題でもある．この問題を捉えるために，ここでは，志那の「感覚」に関する表現を検討してみたい．

「甘美」な至との思い出を回想する志那は，まさに「感覚」の記憶とでも言うように，その内容を自身の身体をめぐる「感覚」とともに回想する．次に，志那をめぐる身体的「感覚」の表現を辿りながら，志那と至の恋愛物語が抱え込む問題について述べたい．

３．「世界から切り離される」ことと「感覚」について

本作は，志那の感覚をめぐる記憶から語り始められる．

> 雨が海面を打つ音，足指のあいだが濡れた砂になでられる感触，波と雨の両方をくぐってなお，あたたかかった男の身体――．（71 頁）

この冒頭に象徴されるように，本作において「感覚」は重要な位置を占める．この引用は，志那が付き合って半年の恋人・至との関係を回想している部分である．この小説の前半部分の大半を占めるのは，至との初めての夏旅行の回想である．この回想には，至との性的関係・身体的な接触が繰り返し登場している．そして，後で分析するが，至の皮膚を志那が食べるという出来事がここに含まれているのだ．このように，本作において触覚・味覚などの皮膚や粘膜をめぐる「感覚」が重要な位置を占めていることは明らかである．

志那の皮膚や粘膜をめぐる「感覚」を考えるときに注意すべきであるのは，それが恋愛関係と不可分に描かれていることである．至との思い出とともに想起される「感覚」の傍には，常に恋愛という対他関係に連なる問題性が存在している．ここで言う「感覚」とは，皮膚や粘膜という，身体が世界と接する表面部分であるために，対他的な関係性という意味を内包する．このように考えるならば，それは恋愛関係，即ち対他関係と相同的な意味合いを持っていることになる．端的に言えば，恋愛における性愛は，皮膚と粘膜を通じて行われるものであり，自他が接触しあう身体の根源的なコミュニケーションが展開されている現場である．だから，「感覚」と恋愛は，ひとつの対を成して当然なのである．

しかしながら，志那において「感覚」と恋愛は，微妙なねじれの中で関係性を結んでいる．このことを考察するために，先に引いた冒頭部分に続く個所を次に引用する．

> 思い出し，志那は不安にかられる．旅から戻って一カ月たつのに，記憶は細部まで鮮やかで生々しい．
>
> あたしは世界から切り離されてしまった．
>
> もう百遍も思ったことを，志那はまた思う．
>
> 〔中略〕この部屋の中で，男と直接結びつくものを目にすることを，志那は極端に嫌う．
>
> それにしてもあの旅は――．その志那も渋々認めざるを得ない．それにしてもあの旅は甘美だった，と．（71 頁）

志那は，「あの旅は甘美だった」と述べ，至との旅を回想しつつも，「あたしは世界から切り離されてしまった」と思いを巡らし「不安にかられる」のである．この「世界から切り離される」という状態こそ，「感覚」と恋愛の関係を考える上での重要な鍵であり，同時に本作のテーマと言えるであろう．

この「世界から切り離されてしまった」という表現は，引用した一節の中でも曖昧なかたちで表現されている．つまり，この表現は二つの意味を持っていると解釈できる．一つ目は，志那と世界そのものの乖離，延いては彼女の孤独を意味しているという解釈である．二つ目は，恋愛に関わって，「世界から切り離される」状態は，至との恋愛関係だけが特化され，それ以外の関係性が断ち切られた状態を意味しているという解釈である．前者は，文字通り解釈であり，この一節にある「不安にかられる」という表現と結びついて，孤独感がより強まる．後者は，「あの旅は甘美だった」と，至との濃密な時間に魅惑された幸福感を指し示す表現と結びつくことで得

られる解釈である．さらに，至との関係は小説内において，破綻したとは書かれていないことからも，恋愛関係にある二人とそれを取り巻く世界との乖離が表現されていると解釈できるのである．

いずれの解釈にせよ，これが恋愛という文脈に依存しているということは，間違いない．男女の親密な関係性のなかで語られる「世界から切り離されてしまった」という表現が含みもつ幸福感と孤独感とが表裏一体をなしていると言えよう．

この表現は，まさに志那のアンビバレントな心理状態を示しているのだ．しかし，それは旅を事後的に振り返った彼女の現在の心理状態を意味しているだけではない．回想の中においても，彼女は孤独感を抱いている．海で泳いでいる際に，志那は次のような感情を抱く．

> 雨雲は恐ろしいほどの速度で移動していた．どうせ濡れるのだから泳ごう，と言い出したのは男の方だったし，志那にも異存はなかった．しかしいざ海に入ると，波が荒い上に強すぎる雨足で視界がぼやけ，まつ毛を頬を，顔じゅうを雨が流れた．雨音が激しすぎて，すぐそばにいる相手の気配すら感じられず，志那は一人ぼっちで灰色の海のただ中にいるような気がした．（72 頁）

志那は至と一緒にいる時に，孤独感を感じていることが分かるだろう．しかし，その直後，至に背中からのしかかられ，口づけをし，そのまま陸に上がって二人は性行為を行う．この時，雨を気に病んでいた志那は，「こうして密着していれば，雨は自分たち二人の外側を，ただ流れていくだけに思えた」（73 頁）と回想するのだ．まさに性行為を経た濃密な身体的な接触，つまり「感覚」的な接触の中で，彼女は「甘美」さに結びつく肯定的な感情を獲得している．遡って考えれば，海の中で感じた志那の「孤独」とは，身体的な濃密な接触が失われたことによって生じたと理解できるだろう．彼女は，身体感覚，とりわけ皮膚や粘膜という感覚器官において男の存在を感じ取り，孤独感を解消していると考えられる．

ここで論じた志那の「孤独」は，前節で論じた志那のアイデンティティに関わる「孤独」とは意味合いが違ってくる．志那は，「孤独」を自身のアイデンティティの中心においていた．しかし，志那はそれを完全に解消すべき感情としているのである．この時点で，すでに志那のアイデンティティが揺さぶられていたと言えるであろう．至との旅における「孤独」とは，もはや至と志那の関係性における「孤独」の問題へと移っていたことになる．

このように，「世界から切り離される」という表現の分析から理解された幸福感と孤独感というアンビバレントな志那の感情や，「孤独」に対する志那の内面の変化は，すでに至との旅の中で生じていたものであった．そして，志那のアンビバレントな感情は，皮膚や粘膜に関わる「感覚」と関わっている．言い換えれば，至との関係そのものが「感覚」を抜きにして語ることができないのである．次節では，この至に対する志那の「感覚」のあり様を検討したい．

４．「孤独」と「感覚」，そして，食人について

志那は，至との夏の旅をこのようにまとめている．「一緒に旅をしたのははじめてだった．男とは，つきあいだしてまだ半年にしかならない．そして，それにもかかわらず，志那は純然たる欲望から，男を食べてしまったのだ」（80 頁）と．性的な能動性を示す言葉として「食べる」と表現するのは言うまでもないことであるが，本作における「食べる」とは，性的な比喩ではない．志那は男の身体を咀嚼・嚥下したのであり，志那は文字通りに「男を食べ」たのである．彼女は「ベッドに誘っているわけじゃないし，キスをせがんでいるわけでもないの．実際にあなたを食べて，消化してみたいの．」（74 頁）と述べている．そもそも，志那にとってこの申し出は，自身の孤独を回避するためにあった．実際に彼女は「あなたを食べればあなたはあたしの一部になるわけでしょう？　そうすればいつも一緒でいられて，なにも恐くなくなると思うの」（同前）と述べている．この回想において，志那の皮膚や粘膜をめぐる感覚が重要であることはすでに述べたが，この場面において，その重要さはさらに重みを増している．

例えば，大澤真幸は，『恋愛の不可能性について』において，愛を次のように規定している．

> 愛とは，私であるということと，他者（あなた）であるということとが，同じことになってしまうような体験なのだ，と．愛とは，私であるという同一性が，他者であるという差異性と完全に等値されている関係なのだ[3]．

男を食べる志那の行為が意味するのは，大澤の言う，自分が他者と「完全に等値」された状態に至ろうとすることであろう．その究極的な方途のひとつが，まさに人を食べるという行為なのである．一般的に，恋愛が自己と他者との距離を限りなく縮め，他者との同一化を欲することであるとするならば，志那にとってそれは，性行為という互いの皮膚や粘膜を接触させる行為にとどまらず，相手を体内に取り込んでしまうという行為に行きついてしまう．ここにおいて，皮膚や粘膜といった身体「感覚」をめぐる物語は，重要な部分に到達することになる．

皮膚や粘膜といった身体「感覚」が，「おそ夏のゆうぐれ」のひとつの要であるならば，皮膚を食べるという行為は，物語の要となる「感覚」が発生する器官を食べてしまうということになる．志那は自らの皮膚と至の皮膚を重ね合わせ接触させることで，至の存在を感じ「甘美」な思い出を思い巡らせてきたのだ．彼女にとっての至の皮膚とは，至の存在を確認する対象そのものだと言えよう．至との接触領域を血肉化し同一化すること．このことにおける思考については，市川浩の身体論『〈身〉の構造――身体論を超えて』[4]において議論された「身」や「身体感覚」に関する規定が示唆に富む．市川は，「身」とは，「他なるものとのかかわりにおいてある関係的な統一」（47 頁）であると定義し，「身の境界が拡がったり，曖昧になることもある．自分と他者との境界がはっきりしなくなって，自分の身の拡がりの中にいわば他者も入ってしまう」（25～26 頁）と述べている．さらに，「身体感覚」については，「自分の感覚であると同時に世界の感覚でもあるような，両義性をもった基層の感覚」（13 頁）であると説明する．この市川の見解に従えば，「身」や「身体感覚」とは，自己と世界が不可分であり，ある瞬間においては世界，あるいは，それを構成する一部である他者と自己とが等価関係で結ばれる瞬間があると述べることも可能であろう．このような「身体感覚」のあり様は，志那の身体――皮膚や粘膜をめぐる「感覚」に伴う欲求を，性愛や恋愛のレベルを超えて，根源的に説明する枠組となっている．このような身体と「感覚」をめぐるメカニズムが，先に引いた大澤の（恋）「愛」をめぐる議論と重なり合いながら，至の皮膚を「食べる」という行為へと志那を突き動かしているのである．

しかしながら，実際に志那が至の皮膚を食べる場面は，身体をめぐるこのような抽象的な理論的枠組によって説明し尽くされるわけではない．文字通り皮膚を食べる行為は，男女のセクシュアリティとその快楽に関連して表現されている．

> 軒下に立ったまま，ついさっき煙草に火をつけたのとおなじ無造作さで，男は自分の左手の皮膚を，薄く薄くそいだ．おや指の横から，手首の方向にむけて．
>
> やめて，と，志那は言わなかった．飼い主が餌をくれるのを待つ犬のように，息をつめてただじっと待っていた．工作に熱中する少年のように，手元に集中している男を凝視しながら．
>
> 果てしないと思われるほどの時間をかけて，ゆっくりとそれはむかれた．半透明の，薄い皮膚．いましがたまで，男の身体の一部だったもの．
>
> 「まあ」
>
> 声がでた．志那が自分でもおどろいたことに，その声は弾んでいた．いいもの，おもしろいもの，おいしそうなもの，を見たときに，子供がぱっと表情をあかるくしてだすような声だった．
>
> 空中にぶらさげるような恰好で，男はそれを差しだした．差しだされるままに，志那は口をあけてうけとった．（76 頁）

この引用で注目したいのは，至がここで「男」と呼ばれている点である．まさに食べる主体であり，男に自らの皮膚を自主的に剥かせるように仕向けたのが志那であることを考えれば，語り手によって至が「男」と名指されることは，特別な意味を生じさせると言える．ここでは，支配権を握る女性に固有名詞が与えられ，その女に従って食される男性は，「男」という脱個性化された普通名詞が与えられているのである．さらにこの語りは，志那の心理にのみ焦点化し，至の感情については語り得ていない．これらのことを併せて考えれば，この場面において至は，志那に対して対象（オブジェクト）化された存在として刻印されていることになるのだ．あるいは，至は，志那に食べられる一つの対象＝性に成り下がっていることを示している．本作から読み取れるのは，幾度となく批判の対象となってきた，能動的な男性と受動的で対象化された女性によって構成される恋愛物語のパターンの転覆という批評性であることは言うまでもない．しかし，その紋切り型の倫理的な批判をこの作品から読み起こすことだけで，本作の批評的な表現を読み取ったとは言えない．なぜなら，志那は至の皮膚を「飼い主が餌をくれるのを待つ犬のように」待ち望み，その後，至が「空中にぶらさげる

ような恰好で」「差しだした」皮膚を，「差しだされるままに，志那は口をあけてうけと」るのである．この部分において，志那は完全なる受動態へと自らの主体を移行させている．「工作に熱中する少年のように，手元に集中して」自らの皮膚を剥いた至と同様に，志那もまた彼に対して受動的になっているのである．このような，主体の能動性と受動性が相互に侵食しあう二人において，その身体「感覚」は，相互補完的な状態になっているのである．

そもそも性愛を出発点とした，皮膚を「食べる／食べさせる」という行為の中には，先に参照した市川の身体論や大澤の恋愛論の議論が示すような，自他の境界が融解していくことと，主体の能動性と受動性とが混在している．この能動性と受動性の混沌が，「感覚」が展開する場面である皮膚を食べる行為を拠所としていることは重要である．言うまでもなく，このような互いが互いの存在を感受しあう究極の身体器官は，志那にとって自身の存在を感受するものでもあるからだ．このことは，性愛が単なる性欲の問題ではなく，存在そのものに関わる根源的な問題であることを何よりも示している．

本作における志那と至の「食べる／食べられる」という表現は，女性の性愛に関して，快楽を受動的に与えられることを拒否することを主張してきたリブやフェミニズムの運動を退ける，志那たちのセクシュアリティの実践として描かれているのだ．だからこそ，この出来事は，志那が「甘美」と呼ぶものにふさわしいと言えるのである．

このように志那は，食べる行為を通じて，文字通り至と同一化したわけである．正確に言うならば，至を自分に取り込んだのである．自他が融解するような瞬間を経験した志那にとって，自宅マンション＝〈孤独の城〉での生活において，至の眼差しを気にしながら生活してしまうという事態が生じるのは当然のことと言える．志那は，至との旅において，至と分かちがたく結びついていることを全ての前提とせざるを得ない，そのような根源的な経験をしたのである．このことが，彼女のアイデンティティの喪失の基盤なのだ．

５．おわりにかえて――「孤独」とセクシュアリティ

本作の後半部分は，その舞台がマンション＝「自分の城」から，その外の空間へと移行する．志那は外出し，そこで，一人立ち尽くす「女の子」を偶然に見かける．そのごく短い時間の出来事と，それに対面した志那の内面が語り手によって語られている．

志那は，〈おそ夏のゆうぐれ〉のなか，「家の外に，何をするでもなく立っている」「小学校に入ったばかりより，すこしだけ大きな女の子」を見かける．〈おそ夏のゆうぐれ〉とは，住宅地の空気が「家々の台所や風呂場から漂いでる音や匂いに侵食されてしまう」，「生活の匂い」に包まれる前の「自然界の放埒な時間」であり，「野蛮で濃密で新鮮なゆうぐれ」だと，志那は定義する．志那によって意味付けられた〈おそ夏のゆうぐれ〉は，まさに志那が小学生だった頃に自ら肌で感じ，その「感覚」を刺激された「なつかしい」「ゆうぐれ」である．〈おそ夏のゆうぐれ〉は，過去の自分を呼び覚ますものとしてテクストに描かれていると考えられる．実際，志那は〈おそ夏のゆうぐれ〉のなかで，自分の姿を女の子の姿と重ね合わせ，その姿を「なつかしい」と感じ取っている．ここから，語り手は，本作におけるもうひとつの重要な志那の回想を捉える．

それは，端的に言えば，志那が子どもの頃に感じ取っていた「孤独」に関する回想である．志那は，〈おそ夏のゆうぐれ〉に佇む一人の女の子を通じて回想する，少女の頃の自分を「恋人も親友もなしに，そんなものを欲しいとも思わず，そこにいた自分」（85 頁）だと考えている．それは，至との恋愛関係において喪失しかけている「孤独」そのものであった自分の姿である．このことは，至との「甘美」な時間を甘受することと「自分の城」の崩壊との間でたじろぐ現在の志那とはかけ離れた，過去の自分を想起したのだと言い換えてもよいだろう．この女の子を眼差し，幼い頃の自分自身を呼び覚ますことで，志那は突如，次のような発見をする．

> 志那は忽然と理解する．自分がいまも孤独であることを．世界に一人だけで存在していることを．そして，仲間だ，と女の子を眺めながら思う．彼女はそうは思ってくれないだろうけれど，あたしたちは仲間だ，と．風が，二人のあいだを時間みたいにゆっくりと流れた．（86 頁）

この時点で，志那は幼い頃の自分と，この女の子を相同的に捉えるだけではなく，現在の自分もこの関係性の中に組み込んでいる．それまで至との関係において，アイデンティティを喪失しかけていた志那は，少女を眼差し，「仲間だ」と認識することで，

その危機を克服するのである．すでに触れたように，この場面では，志那の幼少の頃の「感覚」が呼び覚まされている．志那が，飛躍した思考の中で直感的に現在の自分もまた「孤独」であることを確信するという流れは，「感覚」的であり，物語内においては自然な展開だと言えよう．

そして，直感的，あるいは思考しないという意味で「感覚」的に自らの孤独を確信した志那は，さらに，女の子がチョコレートを食べる行為を目の当たりにし，次のような反応を示す．

> 志那はどきりとする．女の子の横顔も仕種も，海辺で恋人の皮膚をうっとりとのみこんだ志那自身を，まざまざと思いださせたからだ．ある種の食べ物は心をつよくしてくれる．（87 頁）

見知らぬ小学生の女の子がチョコレートを齧った瞬間に立ち会ったことで呼び覚まされる，至との一か月前の夏旅行の「鮮やかで生々しい」（71 頁）思い出．しかし，ここでの志那は，少女と自分とを重ね合わせることで，現在でも自分が「孤独」であると認識している．だから，「どきり」としつつも，至との「甘美」な過去が再び彼女の内面を支配することはない．先述したように，至を「食べる」ことは，自他の境界がなくなるような経験であり，「孤独」が解消されるような経験であった．そこから志那は，自身のアイデンティティが揺さぶられたのである．だが，志那は「ある種の食べ物は心をつよくしてくれる」と述べているのである．「心をつよくしてくれる」と言うように，至を食べるという経験を経て，揺さぶられた志那の心は，今現在において，「つよくなった」のである．それは間違いなく，その危機が乗り越えられたことを意味する表現だと言える．この時点で，至との「甘美」な思い出は，乗り越えられた試練へと変質しているのである．

物語の現在は，女の子が齧る「チョコレートの甘い匂い」（87 頁）を志那が嗅ぎ取り，そして同時に至を食べた後に嗅いだ「白い花をたくさんつけたクチナシの木」（同前）の甘い匂いを思い出すところで閉じられる．「心がつよく」なった志那にとって，至はもはや女の子が齧るチョコレートに等しい．至を食べ，自他が融解してしまったことで，アイデンティティを喪失しかけた志那は，女の子がチョコレートを食べて消化し，彼女の血肉に吸収してしまうように，至は志那の血肉となるのだ．志那の心に侵入した監視装置のような至の眼差しも，効力を失う．

至を食べることが，志那にとっての能動性と受動性がない交ぜになったセクシュアリティの快楽の極みであったとするならば，物語の結末では，志那の完全な能動的な主体への移行が描かれる．女の快楽を否定するフェミニズムに対する乗り越えとして解読されてきた志那と至のセクシュアリティは，最終的に女の能動性へと帰結してしまう．至との性的な交歓――親密性の行方は，男性を消去し，女性だけが生き残る物語へと書き換えられる．そして，この小説にちりばめられた「孤独」という言葉の意味は，志那の「独りぼっち」さを意味するのではなく，男を自らに取り込み，自分自身＝女しかいなくなるということを意味するようになる．本作は，セクシュアリティをめぐる快楽を自分自身だけのものにしてしまうことで，恋愛物語のパターンの転覆を成功させた物語として理解されるのである．

附記

「おそ夏のゆうぐれ」の引用は，『犬とハモニカ』（新潮社，2012，9）による．なお、本論文は、平成 26 年度名古屋大学大学院文学研究科学位申請論文の一部を抜粋し、加筆修正したものである。

参考文献

1）江國香織『犬とハモニカ』刊行記念特集　インタビュー　江國香織／旅と恋をめぐる六つの物語，http://www.shinchosha.co.jp/nami/tachiyomi/20120927_01.html，2015，9 アクセス

2）ミシェル・フーコー：監獄の誕生――監視と処罰，田村俶訳，新潮社， pp.198～227，1977.

3）大澤真幸：恋愛の不可能性について，筑摩書房，p.24，2005.

4）市川浩：〈身〉の構造――身体論を超えて，青土社，1984.

（2015.10.3受付）